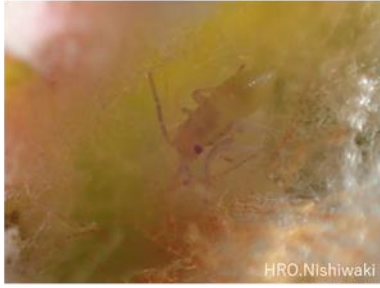


主に芽・葉に被害を与える害虫

①ツマグロアオカスミカメ



発芽直後、展葉前の芽の内部に若齢幼虫が潜んでいる(写真左上)。展葉と同時に孔や縮れを伴った被害葉が認められる。生長点を加害されると芯止まり症状となり、新梢の伸長が望めない。幼虫の加害時期は主に展葉直後と7月上中旬。成虫は6月下旬～7月上旬および8月上旬に園地内で確認(写真右下)。

②ブドウスカシクロバ



道央では5月の下旬に成虫、6月中旬に新梢基部の葉に直径1mm程度で薄く膜を残した食害痕および葉裏には体長1.5mm程度の若齢幼虫を確認。幼虫が成育するにつれて新梢上位に移動し、老齢幼虫では直径1cm程度の食害痕を残し、花穂や幼果も食害する。

本資料は道総研農研本部に無断で転載・改変する事はできません。

③ミヤマスカシクロバ



4月下旬に成虫を確認。発芽後展葉前には芽の内部を食害する若齢幼虫を、6月初旬には中～老齢と思われる幼虫を確認。幼虫はブドウスカシクロバと酷似するが、ブドウスカシクロバに比較して半月～1ヶ月程度早く出現する。

④コスズメ



7月上旬に幼虫を確認
発生量は少ないが食欲は旺盛

⑤ヒメトラガ



6月下旬～7月下旬に幼虫を確認

⑥ハマキムシ類



6月中旬以降に散見

⑦ツヤコガ類（ブドウキンモンツヤコガ・オオブドウキンモンツヤコガ



7月中旬から食入痕を確認。稀に葉全面に多数寄生する場合がある。

ブドウキンモンツヤコガ（写真左）は葉先や葉縁付近の葉内に潜孔して葉の組織を袋状に食害する。加害を終えると蛹化のため形成した“ケース”ごと葉から離脱もしくは葉裏に付着する。オオブドウキンモンツヤコガ（写真右）は葉面の内部に潜孔し、前者よりもやや大きめのケースを形成する。

⑧コガネムシ類



主な加害種はマメコガネ（写真左）である。6月下旬～7月上旬に成虫を確認した。8月上旬まで葉位に関係なく旺盛に食害する。ヒメコガネ（写真右）はマメコガネにやや遅れて7月中旬に成虫を確認した。

⑨ハムシ類



6月中旬にキボシルリハムシ成虫（写真左）が新葉を好んで食害するのを確認。7月中旬～8月中旬にかけてキクピアオハムシと思われる幼虫が比較的旺盛に食害した（写真中央）。この他、ハムシ類によるとと思われる、葉の表面を削るような食害（写真右）を僅かに確認。

⑩ヤマブドウハコブタマバエ



6月中旬、中段位の葉に直径5mm程度の淡緑色～淡赤色で水ぶくれ状の肥大が認められた。およそ1ヶ月で老齢幼虫が脱出した。8月中旬まで繰り返し虫えい(虫こぶ)^{ちゅう}が形成された。被害葉位に一定の傾向はない。脱出痕は斑点症状(写真右)となる。

⑪ブドウトックリタマバエ



8月上旬以降に葉裏にトックリ状の虫えい(虫こぶ)^{ちゅう}を形成。発生はごく僅か。

⑫ブドウハモグリダニ



常発園では展葉直後の葉に寄生が認められる(写真左)。寄生葉は葉表が突出して火ぶくれ症状となり、葉裏には毛茸が密生し(毛せん症状)、ひどい場合は葉表にも毛せん症状を呈する(写真中央)。8月中下旬まで幼若葉に寄生が認められる。

ツマグロアオカスミカメのような芯止まり症状は起こさないが、生育初期から寄生密度が高い場合、花穂先端にも寄生・毛せん症状が認められ、症状部分は開花しない(写真右)。

⑬ブドウサビダニ



7月中旬には多数の寄生を確認した。新葉が下向きに巻き、葉脈に沿って褐変を生じて生育遅延となった新梢では、高密度の寄生を確認した。成葉では葉が薄墨を塗ったような変色が認められる。本種は体長が0.2mmに満たないため、肉眼で寄生を確認するのは難しい。